地域共生社会の視点でスケートパーク設置構想を考える

愛知県長久手市　小口 裕史

１　はじめに

愛知県長久手市は、日本で一番若いまちである。最新の令和 2 年国勢調査では、平均年齢 40.2 歳となっており、これは全国約 1,700 の市町村の中で一番若い。要因としては、市内及び近隣に複数の大学が所在すること、過去からの区画整理や大規模な民間開発が続いており、県内 2 大都市である名古屋市と豊田市のベッドタウンとして子育て世帯が流入し、人口増加が続いていることなどがあげられる。今後もしばらくこの流れは続く見込みで、平成 29 年の市の推計によると、2035 年あたりを境にピークとなり、そこから緩やかに減少していくものと予想されている。

そんな日本一若いまちの現場で起きている問題（課題）の一つに、若者が公共施設でスケートボード（以下「スケボー」という。）をするという問題がある。

本レポートでは、この問題について考察し、市内にスケートボードができる公園施設（スケートパーク。以下「パーク」という。）を設置する構想を軸に、若者と地域住民の主体間・世代間の合意形成や、若い世代が市政や行政に関心をもって参加するきっかけとなる可能性に焦点を当てたい。

本レポートのテーマとしてパーク設置構想を選んだのは、私のつたない行政経験の中でこの対立構造に対するもどかしさを感じていたことが大きい。地域の問題を極力自治体の手を借りずに解決することは、地域共生の核となる重要な要素である。特に、若者が地域社会への参加を深め、行政に興味を持つためには、彼らにとって身近で関心を引くテーマが必要だ。今回のレポートの中心となるスケボーをはじめとするストリートスポーツは、そのような観点から、若者が地域社会に目を向けるきっかけの題材として最適だと考えるからである。

２　スケートボードに関する基礎的な理解

⑴　スケートボードカルチャーについて

スケートボードは、1950 年代に米国カリフォルニアでサーファーたちによって生み出され、徐々にスポーツとして進化した。1980 年代にサブカルチャーとして確立し、ストリートカルチャー、音楽、ファッションと結びつきながら、反体制的で自由な精神を体現するカルチャーとなっていった。日本でも 1970 年代から広まり、1990 年代には米国同様にサブカルチャーとしての地位を築きながら徐々に愛好者を増やしてきた。競技人口については正確な統計がないので把握が難しいが、東京オリンピック（2021）で新種目として採用されたことをきっかけに一気に認知を高めており、競技での日本人選手の活躍もあり、今後もさら

に増加するといわれている。

スケボーの魅力は、その自由度の高さにある。ルールや一定の形式に縛られず、個人の創造性を表現できる点や、ファッション性も相まって多くの若者に支持されている。また、身体能力だけでなく、独創的なトリック（技）やスタイルを追求する文化的な面でも、他のスポーツにはない特色がある。

ストリート発祥のため、元々の練習場所としては公共のスペースや公園が中心であり、競技も階段や手すりを模した専用のパークで行われる。公共の空間（公園、広場、階段、手すりなど）を通常の用途とは異なる形で利用することから一般の公園利用のルールと対立しやすい傾向があり、それが市民への悪い印象とつながってきた側面がある。多くの愛好者は民間や公共のパークで練習を中心に邪魔にならない場所で練習をしているが、アクセス、時間、利用料や難易度の面などもあり、特に初心者は公共空間等で練習をする傾向があるようだ。

⑵　全国のスケートパークの動向

全国に点在する公共のパークを調査してみると、大小実にさまざまなものがある。

NPO 法人日本スケートパーク協会の 2023 年の調査によると、全国の公共パークは 434 か所に上る。東京オリンピックの正式種目として採用が決定する前（概ね 2017 年前後）と 2023 年時点を比べると、公共パーク数は 100 か所から 434 か所と約４倍以上に増加しており、民間の施設も合わせると国内での関心は高まってきているといえる。2022 年の総務省統計局の人口推計をもとに計算（表１参照）すると、東京・大阪などの都市部は人口当たりのパーク数が少ない傾向にあり、その中でも愛知県は人口当たりのパーク数が【約 624,000 人/１か所】と全国で最も少ない。最も多い沖縄県の【約 86,000 人/１か所】と比べると、実に約７倍以上もの開きがあることがわかった。全国的に関心が高まっている中、愛知県内では、需要に対してのパーク設置数が特に少ない。この専用施設の不足は、利用者が公共施設でスケボーをする直接的な原因の一つと考えられ、その受け皿としても、本市がパーク設置を検討する意義はある。また、愛好者に認められるパークを設置することができれば、県内他地域からも注目され、本市のＰＲ効果としても大きい。

順位	都道府県	おおよそ人口（人）	パーク数	パーク数/人口
1	沖縄県	1,468,000	17	86,353
2	長野県	2,020,000	23	87,826
3	島根県	658,000	7	94,000
…	-	-	-	-
―	全国合計	124,947,000	434	287,896
…	-	-	-	-
40	東京都	14,038,000	32	438,688
41	神奈川県	9,232,000	21	439,619
42	滋賀県	1,409,000	3	469,667
43	大阪府	8,782,000	17	516,588
44	鹿児島県	1,563,000	3	521,000
45	兵庫県	5,402,000	10	540,200
46	三重県	1,742,000	3	580,667
47	愛知県	7,495,000	12	624,583

表 1　都道府県/人口/公共パーク数

興味深いのは、人口当たりの設置数が一番多いのが沖縄県という点である。欧米ではストリートカルチャーが地域に根差しており、パークが地域交流の場となっている。沖縄県は日本で最も米国の文化と密接に関わりがあるので、その影響が考えられる。このスケボーをめ

ぐる問題は、ストリートカルチャーや価値観が地域に深く根差していない日本において、競技人口が増加していく過程で起きる摩擦ともいえるかもしれない。

３　スケートボードをめぐる課題

公共の場でのスケボーの問題は時折ニュースでも取り上げられ、全国いたるところで起きていることが分かる。

⑴　新潟市の事例

JR 新潟駅周辺でのスケボーの事例では、迷惑行為は禁止するが、条例にはスケボーの禁止が明記されていないため、対応しきれずに迷惑行為が続いているものだ。新潟警察署は多くの通報を受けるが、警察官が現場に到着するとスケボーをしていた若者たちはすぐに別の場所で活動を再開する。現場でのイタチごっこが続き、根本的な解決には至っていない。

新潟市内には複数のパークがあり、スケボー利用者に対して場を提供している。しかし、これらのパークは駅から遠く、利用料金がかかるため、若者にとって利用しにくいようだ。市議会では、条例を改正してスケボーを禁止する条項の追加を検討している。そうすれば迷惑行為を排除できるが、この条例には罰則規定は設けられていない。議会では「誰もが利用できる」はずの公共施設で、罰則を設けるべき事案にあたるのかどうか、慎重に議論がなされているという。解決策として、公園の一部にスケボー専用エリアを設置することや、若者のニーズに合わせた施設の提供が必要だと考えてはいるが、市民の印象が悪くなっているスケボーを、多くの人が利用する公園の一部を専用とする理解が得られるのかも検討課題となっている。このような状況は、練習施設の不足と、一部の愛好者のマナーの悪さが一因と考えられる。

⑵　マナーと施設不足

スケボーは、若者を中心としたストリートカルチャーである。舗装された場所でしか滑ることができず、競技では障害物の越え方などが採点対象となるため、起伏やベンチ、階段などの施設がある場所が好まれる。そのような機能を備えた場所を個人で作るのは容易ではないため、若者たちは舗装されて広く、障害となる物がある公共空間に集まる。スケボーは基本的に道路や人通りの多い場所では禁止されているが、車や人と接触し得る場所で行い、一般の利用者が使うベンチや段差への接触を繰り返して、施設の破壊、汚損や、騒音の苦情などが問題となっている。

特に都市部では、同様の問題がしばしば起きるが、構図はほぼ同じであり、マナーやルールを守って活動している者も大勢いるが、一部のマナーの悪い者の行いが問題視され、スケートボードコミュニティ全体に悪い印象が定着している。善良な愛好者の中にはスケボー文化の未来を憂い、心を痛めている者もいるようだ。

長年スケボーを趣味とする私の知人によると、そもそも海外で反体制的なものと結びついてきたストリート発祥のカルチャーなので、昔は特に縛られた従順なものよりも、はみ出すことが格好良いとされる風潮があったそうだ。そういった背景もあり、悪印象と結びつきやすい傾向にあるようだ。

４　長久手市におけるスケボー苦情の現状

写真１　２号公園（ウッドデッキ完成前）

次に、本市におけるスケボー苦情に関する対立構造について考察していきたい。本市におけるこの類の苦情は市内複数個所で確認される。特に、大型商業施設であるイオンモール長久手と東部丘陵線（リニモ）長久手古戦場駅に挟まれた広場（長久手中央２号公園。以下「２号公園」という。写真１参照）と、高架下となるリニモ愛・地球博記念公園駅前のロータリーに多い。その中でもこの２号公園には、現在スロープ、階段、ベンチやウッドデッキを空間に余裕をもって配置していることから、スケボー利用者が楽しめる場所のようだ。イオンモールと直接隣接しており、駅利用者の通過交通も多い。雰囲気も良く、多様な世代が利用する公園となっているため、一般利用者からの苦情は上がりやすい。この２号公園のケースを中心に、スケボーをする若者、現場の管理者、市民の三者の状況を現場の声から掘り下げて、背景を確認していく。

⑴　現場の若者の状況

若者はなぜ公共施設でスケボーをするのだろうか。スケボーをする若者の視点に立ってみると、市内には専用のパークがなく、スケボーをする場所というのは意外と見つからない。私自身が現場対応の際に聴取した内容によると、彼らは県内にも専用のパークがあるのは知っているが、遠方であるため、アクセスや利用できる時間帯の面から難しく、身近な場所で仲間と楽しみたいという思いを持っているようだ。

多くの公園は住宅街が近いためできず、大型の駐車場などで練習しているが、しばしば注意されることがあり、その時は場所を移動するか、帰ると話してくれた学生もいた。また、遠くの地方から一人で出てきたある青年は、スケボーができる場所を探して２号公園にたどり着き、この場所でいろいろな仲間とつながることができたのがうれしかった、と胸の内を職員に話してくれたそうだ。

しかし、現場で実際に施設を破損する行為を注意する際には、素直に聞き入れてもらえず敵意をむき出しにされるケースや、反発されることもある。周囲の目に対して肩身が狭いと感じている若者もいるが、注意された時には一度聞き入れたのちに、すぐに戻ってきてイタチごっことなるようなケースも起きている。

⑵　施設管理の視点から

公園を管理する長久手市くらし文化部たつせがある課（前長久手市長吉田の造語。「立つ瀬がない」の逆の意味で、市民みんなに立場や役割があるという意味から命名された。）を事務局として、有識者と公園にかかわる企業と組織などで構成する２号公園利用促進協議会の議事録によると、スケボー利用については度々議論されている。委員から公園内のスケボーの利用に対して、「利用ニーズの高さを感じる。オリンピック種目に採用されるなどメ

ジャースポーツ化していく中で、禁止する方向ではなく、その他公園利用と共存することができないか」といった旨の声や、イオンモールに入っている出展者と協力してスケボーについて理解を深めてもらうイベントをしたらどうかといった案なども出ている。

それでも、現状マナーの悪い利用者も多く目につき、前述のとおり苦情が出るケースは後を絶たない。都市公園である２号公園は、条例に照らせば厳しい対応も可能だが今はスケボー利用そのものを禁止する方向ではなく、他の公園利用者の安全を考えた上で危険なものや、公園施設の汚損や破損、迷惑行為（写真２参照）について注意するスタンスを取っている。同協議会では賛否両論ある中でも共存する方法を模索し、別の場所へのパーク設置や区域を分けるなどの議論もされているが、未だ大きな課題となっている。

⑶　地域住民の視点から

他方で、市に懸念を伝える側の地域住民の視点で訴えの要旨を大きくまとめると、①自身が恐怖を感じた、子供に危険が及ぶといった懸念。②公共施設の破損に関するもの、③騒音

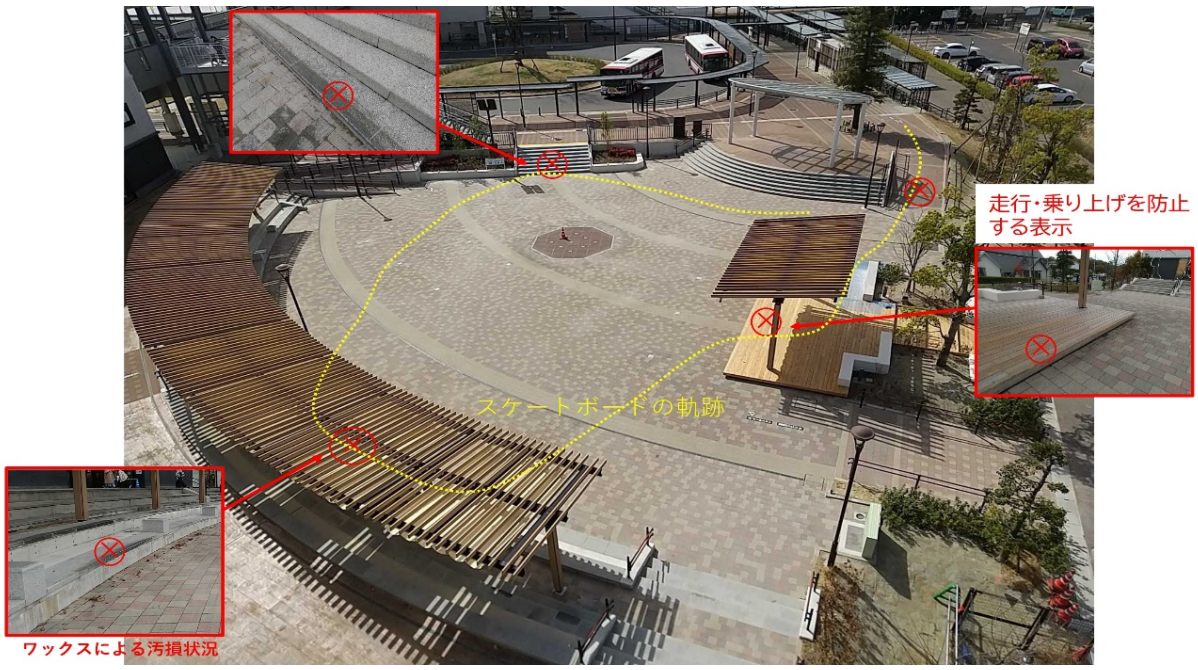

写真２　現場でのスケボー利用の被害状況

に関するものの概ね３つに集約される。

この①には、商業施設や駅からの利用者への配慮やイメージの悪化を懸念するものなども含まれ、寄せられる声には、少なからず若者たちを目の敵にするような感情も見え隠れする。他の公園利用者が気を使って付近を避ける様子は、市民の共有スペースともいうべき公共空間を占拠しているように見え、周囲が不快な思いをするのも理解できる。特に年配の方には、静かな公共空間をよしとする風潮も根強くある。また、スケボーは基本的な公共施設の利用法として想定しておらず、段差やベンチなどに飛び乗る技術などを磨くスポーツであるがゆえに、接触する施設の破損や劣化によって管理コストの増加につながっているところもある。前述のとおり、管理者側は現状では禁止しない意向を持ってはいるが、重大な事故などが起きれば全面禁止せざるを得ないところがある

５　対立構造を乗り越えるために―パーク設置構想に必要な考え方

前章の本市の状況は、新潟市の事例と比べても、よく似た構造であることがわかる。新潟市では複数のパークがあるにもかかわらず駅前で苦情が発生しており、単純にパークを新設するだけでは問題の解決にならないことを示唆している。本章では、この対立構造を乗り越えるために必要な点を、パーク設計と現場管理の視点から考えたい。

⑴　NPO法人日本スケートパーク協会の見解

NPO法人日本スケートパーク協会（JSPA）とは、スケートボーダー、エクストリームスポーツの愛好者やスケートパーク計画主体・施設管理者などに対して、スケートパークの計画支援と提案などを行うことで、こども達の健全育成指導やスポーツ振興、スケートスポーツ等についての正しい知識と理解を得られるようにし、スポーツ文化の発展に寄与するとともに、広く公益に資することを目的として設立されたNPOであり、日本におけるスケートパークコンサルタントとして、「スケートパークを造る」ことで社会への貢献を目指す団体である。

JSPA では、スケートパークを、ただスケボーができる遊具が設置してあるだけの場所ではなく、地域の誇りや文化を育むことのできる教育の場であり、互いを尊敬（respect＝お互いが対等な関係の中で敬意を表すこと）し、多様なものを認め合うカルチャーが存在する場所である、と位置付けている。そのような場所であるためには、ただ施設を作るだけではなく、利用者の声をよく聴き、利用者が誇りをもって守ろうとする場所となるように設計する必要がある、と解説している。これは、利用者にrespectされる場所でなければ、守られるべきルールが守られない場所となり、行政が税金を使って維持管理すべき施設ではなくなってしまうとの考えからだ。

この姿勢は、利用者に愛される施設では自治が働き、治安やルールを守る意識が生まれて、地域と共存できることを示し、後述する本市の掲げる地域共生社会と呼応するものである。ただ施設を作ればOKということでなく、利用者の声をよく聴いて、利用者に愛され、誇りを持てるような施設となる必要がある。

⑵　パーク設置構想の意義と長久手中央２号公園利用促進協議会における議論

パーク設置構想は、一義的には市内のスケボー需要に対応することである。机上の想定では需要を満たすパークができれば道路や公園でスケボーをする若者が減り、各ステークホルダーの意見が反映されるものになるが、これまでの整理から、ただパークを作るだけでは問題が解決しない。それに、パーク設置に関して、市民からの理解は得られるだろうか。この課題の本質は、パーク設置による苦情の解消ではなく、「双方の立場を理解し、考える機会を作る」ことではないかと考える。

長久手中央２号公園利用促進協議会での公園内のスケボー利用に関する議事録の中で、会長である日本福祉大学の吉村輝彦教授が、「利用者の声を聴き、利用者自身が考えていくことがルールの共有につながっていく」と発言している。これは、前述の日本スケートパーク協会の考えとも通じるもので、やはり現場のスケボー利用者の考えを抜きにしてこの問題は解決しないことがわかる。一方で、エリア内の民間事業者関係の委員からは治安や施設管理、イメージ悪化の懸念などから早急に全面禁止を求める声も上がっている。このことか

ら、やはりステークホルダー双方の理解を深めること、スケボー利用者、駅、商業施設利用者の思いや考えを正確につかみ、設置構想に反映させる計画が必要だということがわかる。

６　地域共生社会に向けたコミュニケーションとして捉え直す

⑴　長久手市が掲げる地域共生社会とは

本市では、「地域共生社会」という言葉がまだ一般的に使われる前の 2011 年頃から「市民主体のまちづくり」を掲げ、地域共生社会の実現を目指した取組を行ってきた。本市が地域共生社会につながる基本理念「一人ひとりに役割と居場所がある、助けがなかったら生きていけない人は全力で守る」を中心に、庁内外の関係者や公民の連携によって「多様な社会参加機会の創出」、「誰もが活躍できる地域づくり」に向けて取り組んできたところである。

現在の第６次総合計画（ながくて未来図）でも、市民の困りごとや希望を小学校区単位などの身近な地域で話し合い、地域の課題を地域で解決する意識を醸成することを掲げている。市が目指す将来像の実現に向けて、地域の主体となる人を生み、増やしていき、将来的には地域相互間で支え合う体制へと結びつけていくビジョンとなっている。本レポートで論じるパーク設置構想に多様な世代の市民参加を検討するという方向性も、この方針に整合したものであるべきと考える。本市のこれまでの取組を活かす形で市民参加の検討手法を構築し、若者世代が参加できるような工夫につなげることが必要となる。

⑵　コミュニケーションにおける課題とアプローチ

「日本一若いまち」である本市において、スケボーをする若者を含む現役世代の社会参加の促進は重要な課題である。異なる世代間での価値観や文化の違いが混ざり合う共生社会において、従来の方法とは異なる市民参加の形を模索する必要があるが、特に、世代間のコミュニケーションには、世代ごとの経験や価値観の違いに由来する特有の課題が存在する。これらは、世代間でコミュニケーション方法が違うこと、双方への理解不足から認識にギャップがあること、先入観によるバイアスなども一因であると考えられる。つまり、違いを認識して相互に理解を深める作業が必要になるということだ。理解を深める必要があるものの、若者や現役世代は学校や仕事が生活の中心であり、地域のことに参加する意識が希薄であるという点も、大きなハードルとなる。

本市が地域共生社会の実現に向けてこの 10 年余り実施してきた諸々の施策も、まだまだ種まきの段階である。これまでの価値観を転換するような「市民主体のまちづくり」や、「市民参加」は、市民に定着するまでに相当に長い期間が必要となるからだ。

今回テーマとしたパーク設置構想の背景にある若者と地域住民間のコミュニケーションの課題は、主体間の異なる価値観に対して理解を深める機会であろう。苦情や問題を地域のニーズと期待の表出と捉え直すことで、活力ある地域共生社会を築くきっかけにできないだろうか。異なるバックグラウンドを持つ市民が対話を通じて解決策を見出すプロセスを通じて、若者がまちづくりに関心を持つ体験にもつながることが、本市の未来に重要であると考える。

⑶　市民参加の手法について

それでは、市民が参加する手法として、どのようなものが望ましいだろうか。ここでは相互理解や関心を高めるためのアプローチとして、今回の構想と相性がよさそうなものを取

り上げてみたい。

① 市民討議会（プラーヌンクスツェレ）

ドイツ発祥の住民自治手法を日本風にアレンジしたもので、住民基本台帳から無作為の市民を抽出し、「有償の仕事」として課題を討議させるものである。専門家からの基礎知識の提供などもあり、課題に対する知見の有無にかかわらず公平に議論に参加できる。メンバーを入れ替えて少数で討議を繰り返したうえで結果を投票でまとめて結論を出し、広く発表するという手法である。参加者として市民を無作為抽出することが最大のポイントで、タウンミーティングや公聴会など、参加者を集めるのに苦労し、結果参加者の顔ぶれが固定化してきてしまうという課題に対しての画期的なアプローチとなる。

② フューチャーデザイン

未来の世代の視点を現在の意思決定プロセスに取り入れる課題解決手法である。この手法は、参加者を現在の住民と未来の住民に分け、未来の住民の役割を担う参加者には、数十年後の視点から意見を出してもらうことを特徴とする。このプロセスを通じて、長期的な視野で持続可能な政策や計画を考案し、現在の利益だけでなく、未来世代への影響も重視する。フューチャーデザインは、未来を見据えた都市計画や地域開発において、短期的な利益だけに囚われず、将来への責任を考慮した意思決定を促進する。

ここで挙げた二つは、まだ事例は少ないものの、市民参加の手法として日本でも実施されたことのある手法である。研究中であったり、大学の政策学部などで議論されているので、まずは市内の大学と連携してこういった新たな手法を試験的に実施してみるのも一案ではないか。これまでとは異なる手段にチャレンジする姿勢こそ、今の本市に必要な視点であると考える。市民が意思決定に直接関与する新しい方法を模索するきっかけやアイデアの出発点となることを期待する。

7　設計上の課題と留意したいポイント

⑴　課題と留意点について

パーク設置構想に向けては、設計上の課題もある。設置場所の課題としては、アクセスと夜間利用に留意しなければならない。夜間に利用可能な施設とした場合、近隣の迷惑にならない場所というのは限られるが、いつでも利用できるアクセスのよい施設があれば他の公共施設へのスケボー利用者の流入を防ぐことにつながる。

愛知県豊田市新豊田駅東口駅前広場の「新とよパーク」では、通常公園では迷惑行為となるストリートスポーツやバーベキュー、楽器の演奏などが自由にできるエリアを駅前に作り、市民の「自由と責任」の下、様々な利用を可能としている。このような市民の自主性を重視することで自発的な地域参加の意識を醸成するという管理の方向性も検討する価値があるかもしれない。

その他、資金面では、可能な限り市の財政負担が少なくなるよう模索すべきだろう。資金調達に関しても同様である。近年の公共パークの例を調べると、宝くじ関連の補助金を利用

したものや、ネーミングライツが設定されているものも確認できる。クラウドファンディング、企業版ふるさと納税など、全国の自治体では様々なアイデアで資金を捻出・調達している事例がある。整備の実施に際しては他地域の事例を参考にしたい。

また、スケボーの性格から、苦情が出やすく、住民感情を悪くしやすいことを考えると、新たなパークは、地域に愛され、理解される施設でなければならない。スケボーだけでなく、各種イベントが開催できるような場所とする工夫や、防災拠点としての側面も考慮することで、地域にとって身近で不可欠な施設となる可能性が高まる。可能であれば、Park-PFI などの制度を利用して民間資本の取込みを図り、カフェなどの施設もある複合施設としての機能も併せ持つことを目指したい。

こうした要素から地域に新たな活力がもたらされ、市民が日常的に利用する場としての魅力も高まるだろう。若者が集まる施設であるからこそ地域に調和し、多機能で安全な施設として計画されるべきである。スケボーは、近寄りがたい雰囲気と思われがちなカルチャーだが、ストリートスポーツに関心のない市民のニーズも取込み、積極的な利用を促していくことで、地域の結束を強める場として、その価値を最大限に発揮できるものとなればよい。

８　おわりに

本レポートで提案する設置構想にあたって、市が取り組むべきことは多い。現場で若者たちの声を聴いて需要を的確につかむこと、また、この問題に先駆的に取り組んでいる自治体の話を聞くことや、得られた知見を計画に取り入れること、市民参加の手法を検討するにあたって、大学等の研究機関との協力関係を構築することも重要である。

私が地域リーダー養成塾で先駆者の講義や各地域の活性化に向けた取組を学ぶ中で感じたことは、先進事例となる自治体は、将来の組織や地域のことを考えて市民や職員の育成に投資をしており、失敗を恐れずにチャレンジする風土があるという点である。突き詰めると人を育てることでしか地域は活性化しないからだ。今回私がテーマとした課題にも、考え方ひとつでいろいろな意味を持たせることができる。例えば庁内でプロジェクトチームを作ってこの問題について議論を重ねながら進めることや、市民参加手法を用いて取り組むというのもその一つである。うまくいかない点があったとしても経験を積むことができ、それが財産となる。失敗してもチャレンジすることが正しく評価される組織になることが人材育成につながるのではないだろうか。

本市は、日本一若いまちである。現在その意味は平均年齢が自治体の中で一番若いということでしかないのかもしれない。では、活気のあるまちとは、どんなまちのことだろうか。そこにいる人々が地域で元気に動いているということではないだろうか。今回取り上げたスケボーを取り巻く課題も、全て「活気」の一部であると考える。若者がスケボーをしに集まってくるのも、それに対して市民が市に苦情の声を上げるのも、両方が市の活気であり、大切にすべきものの一部である。雑多な繁華街に活気を感じるように、いろいろな人が混ざる雑多な動きが集まって、活気が生まれるのではないだろうか。そこに暮らす様々な人々がそれぞれの立場で積極的に動くことが、活気を創り出し、本市を「日本一若いまち」にしていくのではないかと思う。だからこそ、いろいろな形で本市の若者が関心をもって社会や地

域と関わる主体となっていくような投資を続ける必要がある。

ストリートカルチャーはよく苦情や意見の対象となるが、本レポートはその解決に取り組む過程を共有することへの道筋を模索する試みでもある。今のままの状態が続けばおそらくスケボー規制を強化する流れとなり、本市の未来を担う若者が追いやられてしまうことになると感じている。スケボーをする若者の側もそのことに気が付く必要がある。パークの設置をきっかけに長久手への帰属意識や愛着、自分事として参加できる市民が増えることを期待している。

最後に、今回述べた内容は、個人の考えを述べたものであり、当市及び関連団体の見解を述べたものではないことを申し添え、本レポートの結びとする。

（参考文献）

・『日本全国公共スケートパーク数調査報告』NPO法人日本スケートパーク協会
https://www.jspa.or.jp/?p=1076
・『長久手市将来人口推計報告書』長久手市
https://www.city.nagakute.lg.jp/material/files/group/2/28zinkousuikei.pdf
・『人口推計（2022年（令和4年）10月1日現在)』総務省統計局
https://www.stat.go.jp/data/jinsui/2022np/index.html
・長久手市HP 長久手市中央2号公園利用促進協議会
https://www.city.nagakute.lg.jp/soshiki/kurashibunkabu/tatsusegaaruka/1/1/15499.html
・『スケボー迷惑行為減らせるか 新潟市新パークへの期待』NHK新潟放送局
https://www.nhk.or.jp/niigata/lreport/article/000/60/
・『新とよパーク新豊田駅東口駅前広場』豊田市
https://www.city.toyota.aichi.jp/shisetsu/sports/kouen/1031163/index.html
・NPO法人日本スケートパーク協会HP
https://www.jspa.or.jp/
・日本最大級スケートパーク検索サイト スケパ！HP
https://sk8parks.net/